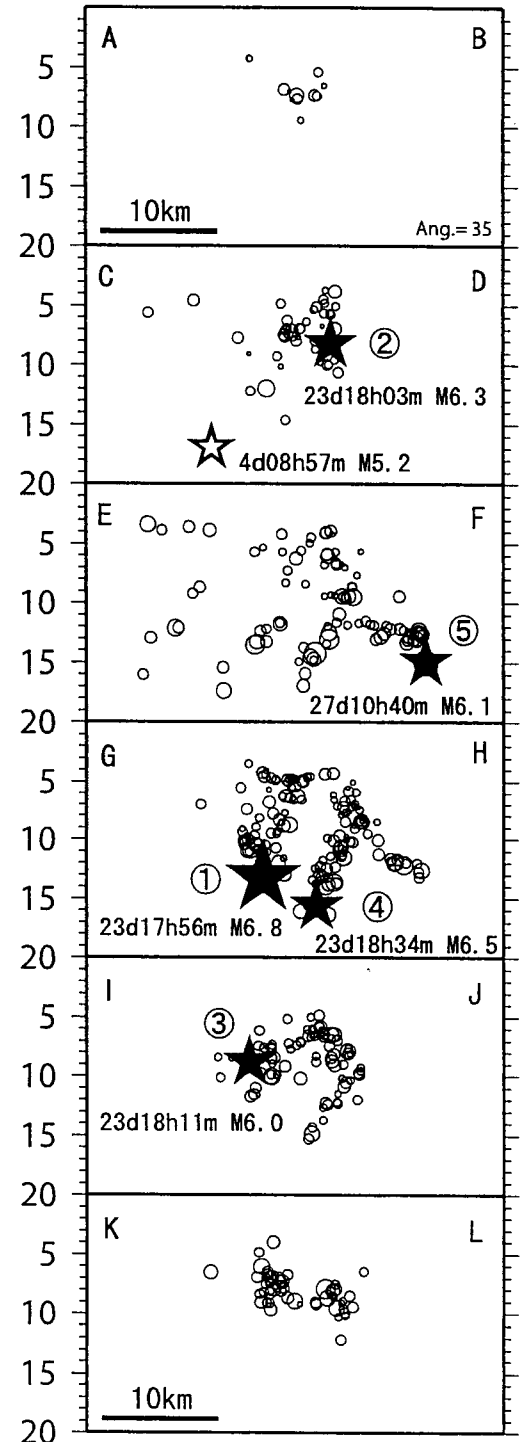
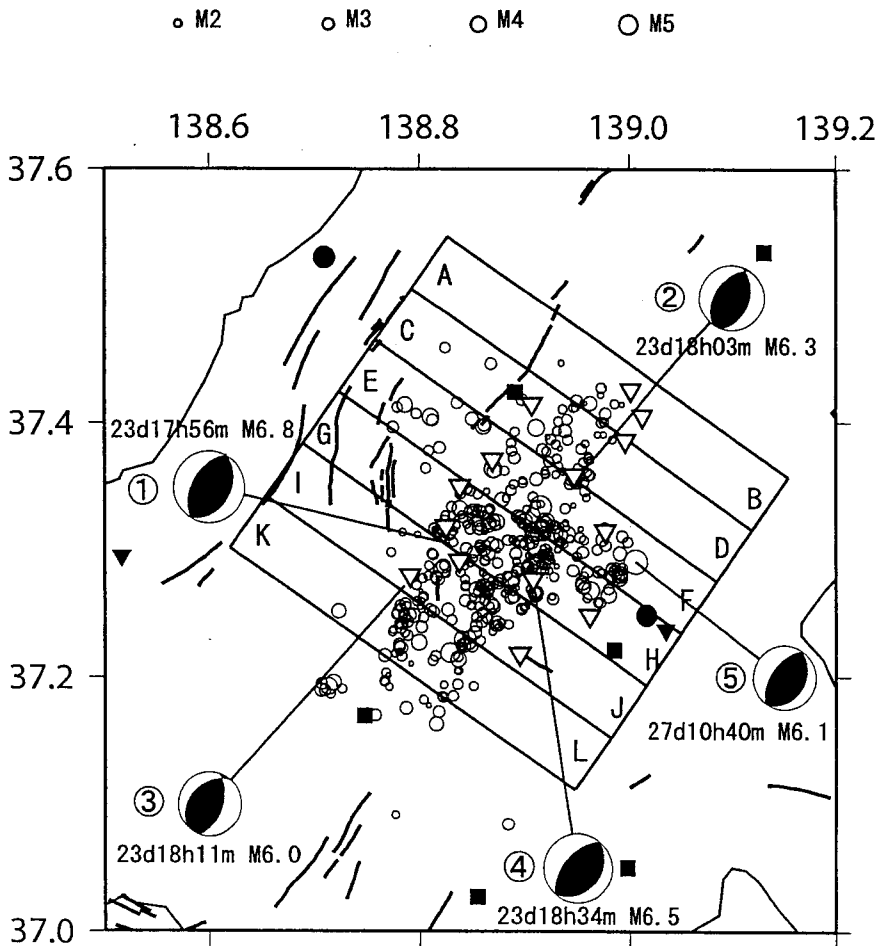


# 緊急余震観測によって得られた震源分布

地震発生翌日の24日から設置された観測点のうち14点を回収し、震源決定を行った。この地域は、東西で大きく構造が違うため、武田(1997)を元にして東西二つの速度構造を作り、震源決定に用いた。観測点ごとの走時残差の平均値を観測点補正值としている。緊急余震観測点のデータが存在する10月24日18時から27日12時において、緊急余震観測点とすぐ近傍のテレメータ観測点だけを用いて震源決定を行った。その震源を元にして、周辺部のテレメータ観測点における観測点補正值を求め、本震やM6級の地震の震源を求めた。その結果、余震分布はひとつの面上に分布するのではなく、いくつかのクラスターに分かれていることがわかった。本震を含む余震の面は、高角な西傾斜で、最大余震を含む余震の面も同じ傾きの西傾斜であるが、それらの面は約5kmの間隔を隔てている。本震発生三日後の27日に発生したM6.1の地震は、本震や最大余震とは違って、低角な東傾斜の面をなしている。これらの分布は、F-netによるメカニズム解と矛盾しないため、これらの面が地震断層面であったと推定される。これらの周辺部でもM6級の地震が発生していて、それらの周辺にも余震が分布している。それらは、低角な東傾斜の面に見えるが、明確な面が形づくられていないわけではない。まず高角西傾斜の本震が発生し、その直後に北端と南端でM6級の地震が発生し、その約20分後に本震のすぐ東隣で同じ西傾斜の最大余震が発生した。そして3日後に、さらに東隣で、低角東傾斜の地震が発生した。



左図の矩形（北から35度傾けた）ごとの断面図が右図。図中のM6級の地震のメカニズム解は、F-netによる。本震及び4つのM6級の地震は、★であらわした。●、■、▼がテレメータ観測点▽が回収した緊急余震観測点。